

Glocal Tenri



3

月刊 グローカル天理 Monthly Bulletin Vol.21 No.3 March 2020

天理大学 おやさと研究所 Oyasato Institute for the Study of Religion, Tenri University

CONTENTS

- ・ 巻頭言
聞きだすけ
／堀内みどり..... 1
- ・ 日系移民の歴史にみる天理教の北米伝道の様相 (最終回)
現代の北米日系人と天理教 ②
／尾上貴行..... 2
- ・ 日本語教育と海外伝道 (20)
日本語教育でのコンピューター利用について③
／大内泰夫..... 3
- ・ キルケゴールで読み解く 21 世紀 (18)
研究倫理と伝記的研究 — カフカとキルケゴールの場合
／金子 昭..... 4
- ・ 「おさしづ」語句の探求 (39)
「おさしづ」第5巻における本席身上願と「道」
／澤井治郎..... 5
- ・ 遺跡からのメッセージ (55)
弥生時代を再考する⑨ エポックメイキングな発掘調査、池上曾根遺跡
／桑原久男..... 6
- ・ ニューヨーク通信 (4)
文化協会を支える人々
／福井陽一..... 7
- ・ コンゴ社会から見るアフリカ・ヨーロッパ関係試論 (32)
大統領暗殺事件 ①
／森 洋明..... 8
- ・ 現代宗教と女性 (26)
「優生保護法」改定阻止運動 ③
／金子珠理..... 9
- ・ 思案・試案・私案
「碑」の字表記問題再考 (5)
／八木三郎..... 10
- ・ 図書紹介 (116)
天理大学教員の近著より — 2019 年度天理大学学術出版助成による著作
／金子 昭..... 11
- ・ 2019 (令和元) 年度「教学と現代」の案内 / 2020 年度公開教学講座の案内..... 12

巻頭言

聞きだすけ

おやさと研究所主任 堀内みどり Midori Horiuchi

20 数年前、「聞きだすけ」ということを聞きました。身上の障り(病気など)や事情のもつれ(日常生活や人間関係などの悩み)を「聞く」ことでたすけていただいた「おたすけ」がかつてはあったということでした。この場合、「聴」という漢字の方がぴったりすると思うのは「傾聴」ということが思い浮かぶからかもしれません。

「傾聴」は、アメリカの心理学者でカウンセリングの大家としても知られるカール・ロジャーズ(Carl Rogers)が提唱した技法とされます。ロジャーズは、自らが行ったカウンセリングの有効例から、聴く側の3要素として「共感的理解」、「無条件の肯定的関心」、「自己一致」を挙げています。天理教では「おさづけ」を取り次ぐ際には、一言でも神様のお話も取り次ぐことが教えられ、

その場合、議論をしたり、相手を説き伏せたりするような態度は厳に慎まねばなりません。(中略) 真実をもって取り次ぎさせていただきます。(https://www.tenrikyo.or.jp/yoboku/otasuke/mijo/)

と相手を尊重する態度の必要を説きます。「親神の話一条」でたすけが可能であるのは、取り次ぐ人の真剣さが伝わり、相手のことを尊重しているという態度の上に成り立つものでありましょう。ロジャーズの傾聴に通じているように思われます。相手の話を、その立場や気持ちに共感しながら理解しようとする傾聴は、当事者を否定することなく、「聴く」ことで相手の悩みや問題を明らかにしつつ、解決を導き出すということになるでしょう。

愛知学院大学の熊田一雄准教授は、「宗教生活において、説法や体験談活動のような『語る』という行為は確かに重要だが、『聴く』という行為の重要性は、宗教学では従来あまり注目されてこなかった。日

本の新宗教である天理教には、『聴きだすけ』という言葉がある。」とし、

先輩布教者の経験から生まれた言葉に「聴きだすけ」というものがある。徹底して聴き、心の痛みを共感する中から事態が見えてくるのである。相手も思いの丈を話すことで、心の重荷を幾分か降ろせる場合もある。／そして事態が見えてきたら、次の段階として、目の前の現実的問題に対処する。その際、必要に応じて専門家や専門機関の活用を検討する(天理やまと文化会議(編)『道と社会』天理教道友社、2004年、p. 56)。

を紹介しています(『「聴きだすけ」ということ』『愛知学院大学人間文化研究所所報』37号、2011年)。

では、現在の「聴きだすけ」はどのような展開となっているのでしょうか。天理教青年会は『あらきとうりよう』275号で「聴く力」を特集、Wa-luck(ワラック)で、『聞き屋』に挑む男たち』を配信し、「新たな形のにをいがけに取り組みむ二人の青年会員を取材」しています。記事は、

駅前で「あなたのお話聞かせてください」と書かれた看板を掲げ、道行く人の話に耳を傾ける。お代は無料。俗に「聞き屋」と呼ばれるこの慈善活動が、一部で盛んに行われている。聞き屋は、東日本大震災で被災した方々の心のケアサポートの一環として始まったといわれる。現在では、お道の中でも、新たな布教のスタイルとして聞き屋の活動に取り組みむ若者が増えている。

と伝えます。熊田准教授は「宗教生活においては『語る』ことだけではなく『聴く』こともまた重要な意味をもつ(前掲論文)と述べます。天理教では先人の経験値が生み出した「聞きだすけ」が、このような「聴きだすけ」となって継承されているように思われます。

現代の北米日系人と天理教 ②

おやさと研究所講師
尾上 貴行 Takayuki Onoue

前号では、現代のアメリカとカナダにおける日本人と日系人、そのコミュニティ形成の多様化についてみてきた。今回は、そのような状況下での日系宗教と天理教の様相と今後のあり方について概観し、本連載のまとめとしたい。

日系コミュニティと日系宗教

日系宗教の諸教団は、主に就労を目的としてアメリカやカナダに渡った日本人たちを後追する形で、彼らが在住する地域で布教活動を開始した。やがて定住化が進む中、各教団は日本人やその子弟が集うコミュニティセンターとしての役割を担い、宗教活動のみならず、社会的・文化的側面でも大きな役割を果たした。日米開戦と同時にほとんどの日系教団の布教活動は中止を余儀なくされたが、終戦後、日系コミュニティの再建と同時に、各教団も徐々に復興していった。戦後にカナダのトロントで仏教会が設立される過程において、「仏教会を通じて日系人は『日本らしさ』を外へ向けて示すことができた」と同時に、カナダ社会の一部であると感じることができた」（飯野、238～239頁）ように、宗教教団が日系人の再定住を支えたという側面もあった。

しかし、北米社会が大きく変動する中で、日系宗教教団のあり方も変化を求められるようになった。北米各地に分散する日系人や日本人の職業やその生活形態は多様となり、国境を越えたトランスナショナルな存在が増える中で、宗教の教えの伝達や実践の仕方も多様化し、従来とは異なる布教方法やネットワークの構築が実践されている（井上、20～21頁）。非日系人へ積極的な布教を行う教団もあり、たとえば禅などは、日系宗教という枠組みを超え、「普遍的な」宗教としての地位を確立しているようにみえる。また地域社会に広く溶け込んで、社会活動や文化活動を展開している教団もある。

日系コミュニティと天理教

天理教は、他の日系宗教と同様に、主に日本人移民を対象として布教活動を展開した。戦中の強制収容、戦後の復興を経て、西海岸地域のみならず各地に教会や布教所を設置し、地域社会への貢献を目指した社会的・文化的活動も展開している。現在も、その活動は在住する日系人や日本人と密接な関係を有している。また教えの根幹に聖地「おぢば」への帰参があるため、日本の教会本部との繋がりも強固であり、戦前から今日にいたるまで天理教は日本との関係においてトランスナショナルな存在であり続けている。

天理教の布教活動が組織的に開始された1920年代から約1世紀が過ぎた。サンフランシスコ・ベイエリアの天理教信者に関するある調査によれば、2010年ごろのアメリカ本土には「2,000人余りいる信者の内、約70%以上を日系人が占めている」と想定され……教会長などの要職に限定すると、日系人が占める割合は実に90%以上にもなり、その内の75%以上が日本から渡ってきた移民世代で占められる」（加藤、83～84頁）。今後、さらに多様化が進むと考えられる日系コミュニティやアメリカ社会で、天理教がどのように展開するかは、これらの教信者たちが重要な役割を担っているといえる。現地で生まれ育った教信者は、天理教の信仰者としてのアイデンティティをもちながら、アメリカ社会において、時には日系アメリカ人として、時には

アジア系アメリカ人として自らのアイデンティティを認識する場面に遭遇している。言いかえると、天理教コミュニティを身をおきながら、日系コミュニティや一般の地域社会とどのような関係性を構築していくか、天理教コミュニティがいかなる存在になるべきか、なりうるかを模索していくことになる。

また日系コミュニティ形成にも地域差があるように、天理教においても、アメリカ本土、ハワイ、カナダといった国の違い、さらに同じ国でも東部と西部など、国や地域において、天理教コミュニティの形成の様態は異なる。ハワイは、アメリカにおいて州人口に占める日系人の割合が最も高い州であり、戦前から今日にいたるまで日本との強い繋がりを保持している。天理教ハワイ伝道庁の山中修吾庁長は「ハワイでは天理教内だけではなく一般社会においても、日系あるいは非日系の男性が日本人女性と結婚しているケースが、他の国や地域に比べてとても多いように感じる。……日本とのつながりが強く、日系人が多いハワイにおいて、お道は今日まで主に『日本人と日系人の宗教』として続いてきた。日系人の宗教としてハワイの日系社会でしっかりと根付くこと、英語を母語とする日系人の方々が自信と誇りを持ってこの道の信仰を保持し伝えていくことが、これからハワイのお道が伸展する大きなカギとなるだろう。」（山中、1頁）と述べている。

本連載では、北米地域における日系移民の歴史的観点から、アメリカ本土、ハワイ、カナダの天理教の歴史と展開を概観してきた。そこでは日本人や日系人たちが、現地地域社会への適応、世代交代、日本文化の継承などのさまざまな事柄にどのように対処してきたかをみることにより、北米地域における天理教伝道の歴史と展開の理解を促進する一助となったと考える。日系コミュニティや日系人たちのあり方が多様化し、変化し続ける現代社会においては、これまで日系コミュニティ、各地に散在する日系人や日本人を中心として展開してきた天理教も、そのあり方や伝道の方向性を多様化し、柔軟に対応することが求められるだろう。

「世界たすけ」を標榜する天理教は、北米地域においても日系人のみならずすべての人々をその救済の対象としている。北米伝道の当初から、「現地化」や「アメリカ化」また「非日系人への布教」は事ある度に議論されてきたが、日系人と日本人の多様化とトランスナショナル化がより進んでいる現状において、彼らのあり方と現地社会のかかわり方から、天理教の北米伝道のあるべき姿と方向性を探ることもできるのではないだろうか。

[参考文献]

- ・飯野正子「トロント仏教会(TBC)と日系人」戸上宗賢編『交錯する国家・民族・宗教—移民の社会適応—』(不二出版、2001年)213～242頁。
- ・井上順孝責任編集『海外における日本宗教の展開—21世紀の状況を中心に—』(公益財団法人国際宗教研究所宗教情報リサーチセンター、2019年)。
- ・加藤匡人「日系アメリカ人天理教信者の研究—サンフランシスコ・ベイエリア在住日系新二世信者の事例を通して—」『アメリカスの天理教—南北アメリカにおける伝道の諸相と展望』(天理大学おやさと研究所、2011年)83～113頁。
- ・山中修吾「ハワイだから」『海外部報』No.614、2016年4月26日、1頁。

天理大学 CALL 教室

筆者は現在、天理大学の非常勤講師として、留学生の基礎日本語（会話）の授業を担当している。依頼を受けた当初、地域文化学科日本研究コースの先生から CALL 教室で授業を行うかと尋ねられ、どのような教室なのか、どんな機器があるのかも知らず、戸惑った。しかし、とても興味はあった。今までやってきたことが役に立つのだろうかとも感じた。結局、授業が始まる前の3月に実際に機器に触れ、説明を受けて使わせてもらうことになり、天理大学4号棟地下のCALL教室へ何度も足を運んだ。ここは昔、LL教室として使われていた教室だ。教育研究支援課分室にはCALLシステムの提供をしているCHIERU株式会社の方が常駐し、授業での利用や機器の操作についてもサポートしてくれる体制になっている。こちらが授業を進める上で、この練習にはこの機能を使えばいいのではないかとアドバイスをくれたり、授業で行いたい希望を伝えれば、それに合う方法を考えてくれたりしてくれた。昔、LL教室であったところが、このように大きく変わっているとはまったくの驚きだった。



写真 天理大学のCALL教室

これに合う方法を考えてくれたりしてくれた。昔、LL教室であったところが、このように大きく変わっているとはまったくの驚きだった。

CaLabo EX

CALL教室に入り、大学から与えられているIDとパスワードを入力しログインすれば、出席管理、機器の一斉操作ができるようになっており、天理教語学院でコンピュータールームを整備していた頃と比べると、雲泥の差がある。また当時、こんなシステムがあればいいなあと思っていたことも実現されていて、ここまで機器は進歩していたのかと驚きを隠せなかった。少し紹介するとログイン後、画面上の「CaLabo EX」のアイコンをクリックするとログインしている学生の一覧が表示され、各学生の画面がアイコンサイズで表示され、何をしているかわかる。学生が勝手にブラウザを開いてWEBページを見ても教師側の操作でWEB閲覧禁止もボタン一つで操作できる。また学生同士をランダムに2人ペアにして会話の練習をさせたり、課題を与えて3人以上のグループを作り、課題の答えを相談させて答えを考え出したりする活動も行える。また全員に発表を聞かせたりもできる。このような機能は、筆者が研究してきたヴィゴツキーの唱える社会的構成主義の学習理論を、CALL機器を用いて具現化しているとも言える。語学教師がアナログで考え出してきた授業方法を、デジタル機器を使い実践できるようになったとも言える。具体的な例を挙げると、教室で学生に5人のグループになってもらい、「一つのテーマについてお互いに意見を出し合って、あとで結果を発表してください」という課題が、ボタン操作だけで即座にグループを作り、すぐに始めることができるということである。イスを持って席を移り、丸くなってグループを作る必要もなく、教師のパソコン

のモニター上で即座にグループを作り、話し合いに入っているというわけである。教師はヘッドセットを付けて、各学生が話し合っていることをモニターすることもでき、インカム機能を使って、その会話の中に割り込んでいくことも出来て、発音などの指導をすることもできる。

ムービーテレコ

「CaLabo EX」はCALL教室全体を制御するシステムであるが、これ以外にも「ムービーテレコ」というソフトがあり、これでマルチメディアを使った授業を行うことができる。最近では教材にMP3形式の音声ファイルが付いている場合などもあるが、それらを取り込み、すぐに再生することもできる。音声ファイルだけでなくビデオなどの映像ファイルも再生できるので、教師がUSBスティックメモリなどに教材ファイルを入れておき、CALL教室に入って、すぐにそれらのファイルをムービーテレコに取り込み、授業で活用することもできる。また録音機能もあるので、教材の音声を聞きながら、発声していくシャドーイングなどもでき、録音モードにしておけば学生の声が録音され、その後、一斉に回収してUSBメモリにコピーして持ち帰り、自分のパソコンで再生し、後でチェックすることもできる。まさにそれがあれば便利だと思う機能が詰め込まれているソフトであると感じる。

機器をどう使いこなすか

「CaLabo EX」「ムービーテレコ」などCALLシステムを紹介したが、これらのソフトには他にもチャット機能などもあり、学生相互に文字で会話することもできる。筆者が19年前に天理教語学院でコンピュータールームの活用を考えていた頃に、こんなことができればいいなあと思っていたことが実現しているようで、時代の流れに驚くと共に機器の進化の速さをあらためて実感した。教育研究支援課分室の職員の方に機能の説明を受け、実際に授業で操作して感じたことだが、授業を担当する教師と機器のサポートをする職員が、よく話し合い連携して授業を作り上げていくことがやはり重要である。なぜなら、コンピューターが専門でない教師はいろいろな説明を聞いても漠然と理解しているケースがあり、職員は機器の機能や操作については詳しくても、教師がどんなことを授業で行いたいのか、授業活動のどの場面で、どの機能を使うべきなのか、話を聞かなければ判断できないからである。またコンピューターに苦手意識を持った教師は、CALL教室でどんな授業を展開していけばいいのか、イメージすらできていないこともあるように思う。ややもするとこれだけ便利な機器なのに、一部の機能しか使わず、宝の持ち腐れのようなことも起こりかねない。その点、天理大学の教育研究支援課分室には常駐の職員がいて、サポート体制がしっかりしていると感じる。筆者もしつこく質問したり、こんな活動をしたいので、その場合にはどんな機能を使えばいいかと、授業内容を説明し、それに対し一つひとつ対応してくれたので助かった。筆者はまだ数ヶ月間、授業でCALL教室を利用したに過ぎないので、すべての機能を理解し、効果的に授業が行えているのか疑問にも思うが、さらにアイデアを出し、活用していきたい。

『忘れられた日本人』は今出せるか

1984 年に出版された宮本常一（1907～1981）の『忘れられた日本人』は岩波文庫として最も読まれている本の一つである。日本全国を旅して歩いた一人の民俗学者が著した、名も無き日本人の生き方と人生観についての貴重なドキュメントで、元は 1960 年に未来社から刊行されたものである。本書中、最も印象深いのは「土佐源氏」の一編であろう。これは「ぼくろう」を生業としてきた老人の人生回顧であり、この作品をめぐって幾つもの研究が行われているほどである。

本書を読んで一つ気が付くことがある。それは、このような本は現代の大学の研究者にはもう書けないのではないか、という思いだ。もし宮本常一が大学教授として、いま全く同じ本を出そうとすると、「待った」がかかる恐れがある。曰く、取材先にきちんと掲載許可を取ったのか。曰く、個人が特定される書き方をしていないか。曰く、差別用語や性的描写など不適切な表現を用いていないか。曰く、事実をそのまま書いてフィクションを交えていないか。曰く、引用など学術論文の体裁を守って書いているか等々。これら一連の研究倫理コードを突き付けられたら、宮本常一は筆を折ったかもしれない。なぜなら、『忘れられた日本人』の各編はいずれもこれらのコードに抵触しているからである。とくに名作「土佐源氏」がそうである。そもそも、これは一人語りする老翁の“ライフヒストリー（生活史）”というよりは、宮本常一による“ライフストーリー（人生物語）”、つまり一つの文学作品なのである。

ところで、私の関係する研究分野、例えば宗教社会学では、取材先の宗教者の個人名を匿名化して、A 牧師、B 僧侶、C 教会長などとするようになっている。近年では、A 教会、B 寺、C 分教会などと、所属も匿名化する研究も見られる。やがて、A 教、B 宗、C 教団などと、宗教名も伏せる時代が来るのではないか。取材内容の掲載にすべて先方の許可を必要とすると、取材先に都合の良いことしか書けない論文ばかりが出てくるのではないか。まさか、そんな極端なことにはならないであろうが…。

人文学の研究においては、実名だからこそその重みがある。ある作家や思想家の伝記的研究において、プライベートな部分をすべて匿名にしてぼかして書いたとしてみよう。その場合、これこれの伝記的事実が彼の文学作品や思想形成に大きな影響を与えたと述べても、そうした論述はいつこうに実感を持って迫ってこないだろう。

カフカとキルケゴールの場合

私がなぜこのようなことをことさら述べるかと言うと、カフカやキルケゴールの伝記的研究が念頭にあるからである。

カフカには恋人が 4 人いたと言われ、中には婚約までした女性も 2 人いる（うち 1 人は 2 回も婚約をしている）。結局、彼は誰も結婚はしなかったが、彼女たちとの交際は彼の作品世界に色濃く影響を残した。彼女たちに宛てた手紙の内、2 人のものが『フェリーツェへの手紙』と『ミレナへの手紙』として刊行されている。もし、恋人たちの名前が A 女、B 女、C 女、D 女だったとしたら、また彼の日記や彼女たちに宛てた手紙が省略だらけだったとしたら、読者はどれだけ興をそがれてしまうことだろう。しかし、幸いにしてそうはならなかった。そも

そも、『審判』や『城』などカフカの名作を我々が今日読めるのは、親友マックス・ブロートの“裏切り”があったからである。カフカは、自分の遺稿作品や日記・ノート類を彼に託し、これらを 2 度までも焼却処分するようにと遺言していた。しかし、ブロートはこれを見捨てて刊行した。彼は親友との約束を守るという友情の倫理よりも、名作を世に伝えるという文学者としての使命感を優先したのである。

一方キルケゴールの場合は、彼自身が独自の人生の使命感を有していた。彼が自らの著作を密かに捧げたのは、レギーネ・オルセンという彼の元婚約者であった。彼がレギーネと婚約したものの、1 年後にそれを一方的に破棄したこと、しかも彼女との関係を連想させるような記述が彼の著作の随所に見受けられることは、同時代の関係者たちにはよく知られていた。当然ながら、キルケゴールの伝記的研究は、この不可解な行動に焦点を当てることになる。

私自身はキルケゴールの一つ一つの作品をそれ自体として丁寧に探究すべきという立場なのであるが、彼の著作活動の解明のためにはやはり伝記的側面にも顧慮する意義があると考えている。彼の死後、膨大な日記が公刊されるに及んで、このレギーネ事件をめぐる伝記的研究も盛んになった。もしこの部分が、単に A 嬢と謎の婚約破棄問題があったなどと曖昧な書き方しかできなかったとすれば、彼の実存を賭した精神生活の解明は隔靴搔痒の感を免れなかっただろう。

学問的良心による精華を見せるとき

言うまでもないことであるが、現在の研究倫理コードは、生身の人間を扱う配慮として、人文学研究においても必要不可欠なものである。このことは銘記しておかなければならない。宮本常一が『忘れられた日本人』を書いた戦後日本社会でもそうだったが、カフカやキルケゴールの時代はそれ以上にそうした配慮が欠如していた。

カフカやキルケゴールは文壇や大学の外部で著作を著したが、彼らもまたその時代的・社会的制約の中で執筆せざるを得なかった。生前、カフカは単に無名であったが、キルケゴールはその晩年、悪質なジャーナリズムの批判にさらされた。著作に関して言えば、カフカの場合、上述のブロートの功績は多大ではあるが、彼はカフカの手稿類を占有し、彼自身の判断による編集や再構成を施していた。ブロート亡き後、大学の研究者らによる丁寧な校訂が行われ、20 年かけて手稿に基づく批判版全集が刊行されたのである。キルケゴールの場合は、死後 20 数年後に彼の日記等が刊行されて、その精神世界の解明がようやく始まり、20 世紀に入って全集が出揃った後、ドイツを中心に注目されるようになった。

しかし、その評価は実存哲学の創始者としての限定付きのものであり、彼自身の思想の全体像の解明は今日に至るまで続いていると言ってよい。そうした解明作業は、現在ではいづれも学問的良心の下で行われ、これこそ研究者による探究の営みの精華を示すものである。ただ単に法令遵守のレベルで受け取られている研究倫理であるが、学問的良心に基づく真理探究こそ大学における本来の研究倫理のあり方だと言えるだろう。

「おさしづ」第5巻における本席身上願と「道」

『おさしづ改修版』第5巻(明治33～34年)の本席身上願における「道」の用例を整理する。第5巻には本席身上願の「おさしづ」が9件ある。そのうち、「道」が用いられるのは8件、3回以上「道」が繰り返し用いられるのは6件である。

刻限と本席身上願

本席身上願は刻限の「おさしづ」とほぼ同様の位置を占めるものと考えられているが、第5巻の本席身上願の割書きをみると、その意味合いがよく分かる。たとえば、明治33年10月14日の「おさしづ」割書きには次のように記されている。

本席御上一昨日の午後四時頃より俄かに発熱し、本部員一同集会の上親神様へ御願を掛け、その願には御身上速やかお成り下され次第、御障りの事第一に御願い申し、さしづ通り運ばして貰いますと願、尚本局より電報の事情ありますから、この間御障りの事御願い申し上げますと願

このように、この「おさしづ」は本席の身上平癒を願うため、指図通り事を運ぶという本部員一同の誓いのもとに伺われている。同じようなことは、(さ33・3・21、33・9・14、34・6・14)の割書きにも記されており、本席身上願の意味合いの重さが分かる。また、第4巻から、「用いるものがないから刻限論しにくい」という趣旨の言葉が何度かあることから、むしろ当時の人々にとって刻限よりも本席身上願のほうが差し迫ったものとして受け取られていたのではないかとも思われる。

天然の道

本席身上願の内容は、刻限と似たような文脈で説かれることが多い。第5巻では一派独立請願との関連で次のように説かれている。

「又候一つ同じように一つ別派という、独立という、小さいものが先という。この道というは、どうと皆思う。心はころりと違^{たが}違^{たが}う。そこで、どうでもこうでも天然と言うたる。天然の道には急いたて行くものやない。天然は道理で出来たもの。あちらへ頼みこちらへ頼み、それは代を以て代物買い寄せるようなもの。代を以て買い寄せるは仮名なもの。この道始め掛けたは、なかへ容易で出来たものやない。何も知らん者寄って、高い低いは言わず渡りた。そこで、じっくり溜めて置けば天然という。天然はふしある。天然というはふしから理治まる。これは天然と言う。急いては行くものやない。急えたと行けやせん。一足に跨^{また}げる事出来ん。そら行けやせん。踏み台無くばいかん。どちらへなりと跨げようと言うは世情という。まあ、これから聞き分け。成っても成らんでも構わん。掛かりは年相当の者寄り合うて天然の道を楽しんで居る。一代はどうでも苦しみ通ってくれるは、神の楽しみ。連れて通る道ある。」(さ33・9・14 本席身上願(本席御身上夏頃より少々御障り有之、……夜前御身上御障りに付本日一同揃うて願))

この頃、第1回一派独立の請願に追加添付するために、『天理教教規』、『天理教教典』、『御神楽歌積義』などの教義、組織に関する書物が編纂されていた。この「おさしづ」では、「この道」にとって独立というのは小さいものであり、「成っても成らんでも構わん」と言われている。そして、大事なことは、「この道」

の始めかけに、「何も知らん者寄って、高い低いは言わず渡りた」ように、何か人間思案から思惑を立て一足跨ぎに切り抜けようとするのではなく、苦しいなかもじっくりと神にもたれて通ることを促される。そうすれば、神がだんだんと連れて通ると論される。こうした道の歩み方を「天然の道」という言葉で教えられている。

道の上の土台／順序の道

当時には、「天理教ほんに偉いものや」(さ34・5・25)と世間から認識されるようになってきていた。「おさしづ」ではその土台はどこにあるかを忘れぬようにと強調されている。

「道の上の土台据えたる事分からんか。長い間の艱難の道を忘れて了うようではならん。土台々々分からず、土台に理無くば、何時どういふ事にいずんで了わにゃならんやら分からん。世界大恩忘れ小恩送る、というような事ではどうもならん。この順序早く聞き取って、心にさ^んげ、理のさ^んげ、心改めて、ほんにそうであったなあ、と順序の道を立ったら、日々理を榮える。」(さ34・2・4 本席先日より御身上御障りに付、……本日願／押して、平野より教校地所買入れの事に付申し上げ)

このようにこの道の土台には、長い間の艱難の道があると言われる。先の引用の「おさしづ」(さ33・9・14)にも「この道始め掛けたは、なかへ容易で出来たものやない」とあり、長い間、教祖によって艱難のなかを通過して始められた道があつて、いまの姿がある。こうした順序をたてて何事も判断するように説かれている。

そのようにして通る道は、具体的にどのような姿であろうか。

「これもさあへ道をつけるは皆の楽しみ。指五つに加わりてくれ。」(さ33・9・14)

「何も遠慮気兼は要らん。高い低いはありやせん。道という、一つである。一つからの理なら、十人なら十人知ってるは道なれど、十人の中に三人くらい知ってるというは、神の道ではない。」(さ33・10・14)

指五つに加わるというのは、皆がつながりあうということである。そこには遠慮はいらず、高い低いもない。皆が一つに結び合つて通るのがこの道のあり方であるとされる。その際、優しい言葉が非常に大事であると教えられる。

「皆来る者優しい言葉掛けてくれ。道には言葉掛けてくれば、第一々々や^しきには優しい言葉第一。何も知らん者、道はこんなものかと思てはならん。年取れたる又若き者も言葉第一。愛想という事、又一つや^しきに愛想無うては、道とは言わん。男という女という男女に限り無い。言葉は道の肥、言葉^たん^のうは道の肥。」(さ34・6・14 六月一日より本席御身障りに付……如何の事でありますや願／二間半に両庇、四畳半と六畳とに押入付のものを並べてさして貰います、と願)

このように、「この道」(神の道)の土台が説かれ、皆がその元に根差すお互いとして言葉を掛け合い、一つに結び合つて、教祖によって付けられてきた道に真実を尽くす歩みを進めるように論されている。

弥生時代を再考する⑨ エポックメイキングな発掘調査、池上曾根遺跡

ちょうど50年前の昭和45年(1970年)、「人類の進歩と調和」をテーマに掲げて開催された大阪万博(EXPO'70)は、昭和39年(1964年)の東京五輪と並んで、日本の戦後復興と高度経済成長を象徴する、まさにエポックメイキングな出来事だった。千里丘陵の万博会場は、183日間の会期を通して、延べ6,400万人を超える入場者を集めたが、当時、小学校2年生だった筆者も、今は亡き祖父母、父母らとともに会場を訪れ、熱気の溢れる雰囲気、圧倒されたことが懐かしく思い出される。万博の誘致、開催に向けては、アジア初の五輪が開催された東京に負けまいと、大阪近辺で、市街地の改造や道路、鉄道などのインフラ整備が一気に進められた。

昭和39年(1964年)、大阪と和歌山を結ぶ幹線道路(第二阪和国道)の建設計画が正式に発表され、和泉市の池上曾根遺跡(当時は池上遺跡と呼称)の上を路線が通過することが明らかになった。池上曾根遺跡は、地元の教師や生徒の活動により、その頃までには、弥生時代の大規模遺跡であることが知られるようになっていて、南繁則氏を中心とした地元有志が「池上弥生式遺跡を守る会」を結成し、保存を求める活動が広がった。しかし建設省は万博までの開通方針を崩さず、新国道の遺跡通過が避けられない事態となり、当時としては空前的規模となる緊急発掘調査にどう対応するか、関西の考古学界は騒然となった。それまでのように、大学の研究室や有志による体制では対応できないことが明らかで、金関先生や佐原真氏が加わった委員会で検討を行った結果、新たな調査体制を構築することが決定した。「第二阪和国道内遺跡調査会」という組織が新たに発足し、金関・佐原両委員の指導のもと、若手の調査員が専従で現場作業にあたることになったのだ。膨大な面積を短期間に発掘する必要に迫られた調査会は、作業の迅速・合理化を図るため、金関先生の提案に従って「イスラエル方式」を採用し、発掘作業と遺物整理作業を分離して同時に行う態勢を取った。こうして、昭和44年(1969年)2月から昭和46年(1971年)9月まで、道路路線部の約1.8万㎡(幅30m、総延長約600m)について発掘調査が実施された。



写真1 調査風景の再現模型
(大阪府立弥生文化博物館)

発掘調査では、弥生時代各時期の遺構と夥しい遺物が出土し、弥生文化の解明に画期的な成果をもたらすことになった。集落を囲む環濠が多数存在することが確認され、

査など、大阪府内における遺跡調査を継続的に担当することになった。大阪府では、このように、全国に先んじて、行政発掘の体制が本格的に整えられたのだ。

新設された国道に隣接する遺跡の中心部は、昭和51年(1976年)、約11万㎡の範囲が国の史跡に指定され、保存されることが決定した。現在の経済活動において重要な大都市周辺の平地部で、前例のない広範な面積が史跡に指定されたのは、市民レベルの幅広い保存要望が実を結んだ結果と言える。史跡指定20周年を翌年に控えた平成7年(1995年)、文化庁の「古代ロマン再生事業」の第1号として、保存された池上曾根遺跡の中心部について、史跡公園の整備を行うための発掘調査が行われた。その結果、集落中心部に、弥生時代中期後半の大型

掘立柱建物とクスノキの丸太をくり抜いた大きな井戸枠が存在することがわかり、近畿地方で弥生時代の大規模集落の構造が



はじめて具体的に写真2 整備された池上曾根遺跡史跡公園
解明された。この成果を受けて、「弥生都市論」が提起されるなど、池上曾根遺跡が新たに注目されることになった。さらに、翌年(1996年)には、年輪年代法によって、ヒノキを用いた大型建物の柱材のひとつが、紀元前52年に伐採されたことが明らかになった。その結果、近畿地方における弥生時代中期後半の年代をそれまでの想定より約100年古く考えざるを得なくなり、まさに歴史を塗り替えることとなった。

このように振り返ると、池上曾根遺跡は、昭和から平成の各時代において、2度にわたって、エポックメイキングとなる発掘調査が行われ、弥生時代研究のみならず、同時代の社会に対しても影響を与えてきたことがわかる。昭和40年代の国道建設に伴う緊急調査は、金関先生の貢献もあって、その後の日本における緊急発掘調査の体制を整備する契機となり、関係者の努力で集落中心部が史跡として保存された。平成の時代には、史跡公園整備に伴う集落中心部の発掘調査で、大型建物とくり抜き井戸が発見され、年輪年代法によって弥生時代の実年代が更新される大きな成果が導かれた。平成3年(1991年)には、遺跡の南に隣接して、弥生時代をテーマにした全国唯一の博物館として、大阪府立弥生文化博物館が開館し、金関先生が初代館長を平成26年(2014年)まで務められた。平成11年(1999年)、現地に復元された大型掘立柱建物は、「いずみの高殿」と命名され、幹線道路沿いの史跡公園内に静かにたたずんで、地域のシンボルとなっている。

[参考文献]

秋山浩三『弥生実年代と都市論のゆくえ・池上曾根遺跡』、新泉社、2006年。

文化協会では、現地の人々や諸団体と協力しながら様々なイベントが開催されている。最近の動きを紹介しながら、文化協会を支えてくれている人々も紹介したい。

オーストラリア災害復興支援

1月19日、オーストラリアの森林火災の復興支援のためのチャリティー・コンサート <Strads for Fire> が文化協会で開催された。ニューヨークで活躍する優秀な若手演奏家たちが中心となり、バイオリン専門店 Florian Leonhard 社から、希少価値があると言われるストラディバリウス弦楽器の無償貸与を受け、在ニューヨークオーストラリア領事館などの協力を得て実現した。このイベントは、文化協会で行っていたバイオリン奏者 Nune Melik さんの発案から始まったが、彼女は violin.com 社によって「2017年のベストCD」にも選ばれている人気のある演奏家だ。ニューヨークには、世界中の優秀な音楽家が多く住んでいるが、演奏に適した会場がなかなか見つかりにくい。文化協会がそのような場所を提供できることは、ありがたいことでもある。このように、演奏家をはじめ現地の方々にも喜んでもらえる貴重な場所になっているのである。

If Music Be the Food コンサート



写真1 「If Music Be the Food」コンサート

「If Music Be the Food」と題したコンサートシリーズが2年前から文化協会で開催されている。これは、ニューヨーク市で食べ物に困っている人への援助意識を高めることを目的としたものだ。入場チケットの代わりに、食料品あるいは現金のドネーションを取って参加する。集められた食料品と寄付金は、ニューヨーク市の500のコミュニティー食料プログラムに食料を提供している団体シティー・ハーベストを通して配られる。

会場は、毎回満員の盛況だ。メトロポリタンオペラやニューヨーク・フィルハーモニックに出演するアーティストの演奏を間近で満喫できる贅沢なイベントで、とても人気がある。これまでに集まった食料品や現金を食料に換算すると、その総重量は20トンを超える。

文化協会だけの力では、これほど優れた演奏会はとても開催できないが、現地の方々との繋がることで実現でき、しかも現地の信用も得られることは、誠にありがたいことだ。

文化協会のピアノ

文化協会のピアノは1955年製のスタインウェイのグランドピアノBで、とても美しい音色を醸し出す。もともと片腕のピアニストとして有名なパウル・ヴィトゲンシュタイン

氏が愛用していたものだ。作曲家のラヴェルやプロコフィエフが彼のために左手だけの曲を作曲している。本人の遺志により、このピアノはアメリカレシエティツキー協会に寄付され、多くの若いピアニストのために使われることになった。しかし、レシエティツキー協会には、このピアノを設置する場所がなかった。写真2 アルバート・ロットさん



め、不思議なご縁を得て、文化協会のクラシック音楽を担当しているアルバート・ロットさんの尽力で、2003年に文化協会に常設されることになった。

このピアノはとても好評で、多くのピアニストたちに愛されている。カーネギーホールのピアノ調律師の話では、カーネギーホールのピアノと同じぐらい素晴らしい音色がすることだ。

文化協会のコンサートシリーズは1993年6月にアルバート・ロットさんがカワイのグランドピアノを提供してくれたのをきっかけに始まった。ロットさんは、もともと文化協会日本語を学ぶ生徒の一人だったが、文化協会の芸術アドバイザーを務めながら別席も運び、ようぼくとなった。文化協会をニューヨークでも人気のコンサート会場として築きあげた功労者でもある。

天才ピアニストとして名高く、彼の手から紡ぎ出されるピアノの音は、張りのある艶やかな音で、詩情あふれる音色は、聴く人の心を捕らえて放さない。ジュリアード音楽院で博士号を取得している。

アート・アット天理シリーズ

西洋音楽と邦楽のコラボレーションを提供するアート・アット天理シリーズは、虚心庵尺八道場と共催しLMCC(ローアー・マンハッタン文化基金)の協力を得て2007年から開催されている。シリーズを担当するジェームス如楽シュレファーさん(ようぼく)は、虚心庵道場の創設者で、作曲家としても活躍し、2015年12月に音楽業界に影響を与える音楽家トップ



写真3 ジェームス如楽シュレファーさん

30に選ばれた。昨年10月25、26日には、台風19号の災害復興支援のためのチャリティーコンサートが行われ、収益金約1,100ドルが寄付された。

各方面から優秀な人材が引き寄せられて、それぞれの徳分を存分に発揮しながら、文化協会の活動を支えてくれている。また、活動を通して信仰を深めてくれる人も出てきている。これからも、神人和楽の世界をますます提供していける楽しみな場所である。

大統領暗殺事件 ①

おやさと研究所教授
森 洋明 Yomei Mori

マヤマヤ空港から街の中心へ続く道は、片側2車線の広い舗装道路である。フランス文化センターがある市内で最も大きいロータリー交差点(ラウンドアバウト)からは、現大統領の名前をとってドゥニ・サス=ンゲソ通りと呼ばれている。その道路沿いには、法務省や内務省、軍の施設やさまざまな国際機関の建物があり、大統領府もその沿道に位置している。そこからもう少し街の中心に近づくと、マリアン・ングアビ博物館(Musée de Marien Ngouabi)がある。暗殺された3代大統領の記念館で、1981年に設立された。



マリアン・ングアビ大統領の霊廟

広大な敷地は鉄の柵で囲まれていて、その中には植民地時代に軍関係が使用していた建物が残されている。独立後もコンゴ軍の宿舎として使用され、軍人であったングアビもそこに居住していた。また、通りから見えるコンクリート造りの重厚な建物は故人の霊廟となっている。建物の壁には「マリアン・ングアビ大統領の不滅の栄光 (Gloire immortelle au Président Marien Ngouabi)」と書かれている。なお、この博物館は90年代初頭の国民会議で「国立政治歴史博物館」と名称が変更された。

ングアビ大統領暗殺事件は、1977年3月18日の白昼に起きた。当時、彼は毎週金曜日の午前中はブラザヴィル大学(後にマリアン・ングアビ大学に名称が変更)で教鞭をとっていた。軍人として階級を順調に登っていく一方で、彼は太陽エネルギーの活用に関心を持っていて、フランスで物理学のDEA(高等教育免状)を取得していた。その日、大学の講義を終え統合参謀部に戻ってきた大統領は、昼食の前に2人の面会に応じている。その内の1人はエミール・ピアエンダ(Emile Biayenda) 枢機卿で、後に大統領に面会したことで命を落とすことになる。ングアビ大統領は大統領官邸には住まず、それまでの住居を使っていたようだ。昼食を済ませた大統領は、近づいてきた3人によって突然襲われ、銃弾で命を落としたのである。軍の病院に運ばれたが、死亡が確認されただけだった。

この大統領暗殺の実行犯の1人はその場で射殺されたようで、事件に直接関与したとされる人たちもその後処罰されてしまった。関係者が亡くなったことで、暗殺の目的や実際に彼らを動かしたとされる黒幕に関しては明らかになっていない。それは現在も謎として残っていて、真相ははっきりしないままである。

大統領が暗殺された後の軍の動きは迅速だった。その夜にはすぐに大統領に代わる暫定的な「党軍事委員会 (Comité militaire du Parti)」が発足した。メンバーは軍の高位にある11名で構成された。大統領の権限を引き継ぎ、1973年に制定された憲法による国家体制の一時停止を決定し、戒厳令を敷いた。ただ憲法では、大統領が不慮の出来事で不在となった場合は、国民議会の議長が代行すると定められていたが、それは適用されなかったのである。この委員会はその後4代大統領となるヨンビ・オパンゴ大尉とその後継者となるサス=ンゲソ少佐によって指揮されていた。

この暗殺事件の前からすでに、政治的に不穏な動きはあった。

例えば、1972年2月にクーデター未遂事件が起きている。首謀者たちは政府要人を拘束し、ラジオ局とマヤマヤ空港を占拠した。そのとき、首都から500km離れたボワント・ノワールにいたングアビ大統領は、フランス人が操縦するセスナ機を借りてその日の夜に首都に密かに戻り、クーデターを鎮圧することができた。また自身が創設したコンゴ労働党(PTC)のなかでも、彼の政策に異を唱えるものもいたようで、党内で少しずつ孤立し始めていたようである。さらに、1976年3月には、ヘリコプターの事故で九死に一生を得たこともあった。当時、国の経済は悪化の一途を辿り、不満の声が国内にくすぶっていた。

こうしたなか、ングアビ大統領はマサンバ=デバ前大統領に意見を求めることがあったようだ。マサンバ=デバはングアビによって大統領辞任に追いやられたが、その後2人は何回か会談を行っていた。大統領の命が狙われていると、マサンバ=デバが助言したこともあると言う。なかには、ングアビ大統領がマサンバ=デバに政権を返すという計画があったとも言われている。しかし、大統領が暗殺された1週間後、この前大統領は暗殺の首謀者として処刑されるのだった。

ングアビ大統領は、自身に降りかかる危険を察知していたのかもしれない。暗殺される5日前の演説で彼は「国が汚れ恒久平和を失うとき、その血でもって国を洗い流すしか清廉と統一は取り戻せない。(Lorsque ton pays est sale et manque de paix durable, tu ne peux lui rendre sa propreté et son unité qu'en le lavant avec ton sang.)」という予言とも取れる謎めいた言葉を残している。

ブラザヴィルから国の北方へは国道2号線が通っているが、45kmまで進んだところに、その距離にちなんで「キャラント・サンク (Quarante-cinq : 45)」と呼ばれる村がある。そこにもマリアン・ングアビ博物館がある。2010年私が訪れたときは、街中にある立派な博物館とは異なり、建物が老朽化し、維持管理が十分なされていない印象を受けた。薄暗い部屋には古びた銃や故人の遺物とともに、旧式のラジオが置かれていた。屋外には古いセスナ機とボロボロの車があった。

実は、1972年のクーデターの際、ングアビ大統領が急いで首都に戻るためにセスナ機で降り立ったのがこの村だった。マヤマヤ空港は反乱軍に占拠されているので使えない。そこで舗装された国道2号線にセスナ機を着陸させたのである。ングアビ大統領はその後、たまたま通りかかった車を借りてブラザヴィルへ戻って行った。その車の運転手は「私は大統領だ、緊急事態だから車を貸してくれ」と言われても、すぐには信じられなかったようである。博物館に置かれていたセスナ機と車はその時に使われたものである。そしてラジオは、「首都に戻って2時間後に政権を取り戻し、ラジオを通じて公表をする」と言って大統領が村に残したもので、実際、村人たちは、2時間後、クーデターが鎮圧されたニュースをそのラジオで聞いたのだった。



村の博物館の屋外に展示されているセスナ機と車

「優生保護法」改定阻止運動 ③

2019年11月末、1980年代に内閣総理大臣を務めた(1982～1987年)中曽根康弘氏が101歳で亡くなった。最後の昭和の証人とも言うべき中曽根氏の手記「二十三歳で三千人の総指揮官」(松浦敬紀編著『終わらなき海軍』文化放送、1978年所収)には、海軍主計中尉であった氏による「慰安所」に関連する記述がある。これについて氏は、従軍慰安婦が詰める「慰安所」ではないと否定しているが(2007年3月23日、日本外国特派員協会)、2013年3月8日の衆議院予算委員会で示された防衛省の資料「海軍航空基地第二設営班資料」(防衛研修所戦史室)との整合性をめぐっては、不明確な点もあり、生前に真実を明らかにしてほしいところである。

さて、中曽根氏は、同時期の米国大統領ロナルド・レーガン(1981～1989年)との「ロン・ヤス」関係の下で、日米の関係強化を構築したと言われるが、日米両国は、プロファミリー政策という点でも共通点があったことは、本誌(2019年9月号)で述べた通りである。日本では、政治における急速な保守化がみられた時代であった。

このような1980年代に学生生活を送っていた筆者自身は、1970年代のリブに乗り遅れた世代として、初めてこの時期にフェミニズムの洗礼を受けることになる。男女雇用機会均等法(施行前年に学部を卒業したため恩恵には与れず)、山のように出版されたフェミニズム関連書籍、自治体等によるフェミニズム講座の隆盛、新聞紙上におけるアグネス論争等々。その中で振り返ってみれば、もっとも印象に残っているのが、1980年代における「優生保護法」改定阻止運動であった。女性の「からだ」に直接かかわる事項が、当事者である女性の頭上で、政治や宗教によって決定されかねないこと、そもそも女性自身が自分の「からだ」に対する知識を十分に持ちあわせていないことに対し、愕然としたのである。1980年代には折しも、富士見産婦人科病院事件(埼玉県所沢市)も起きている。

その時分、フェミニズムは学問とみなされておらず、したがって大学の図書館には筆者の関心に応えるような資料は少なく、飯田橋駅直結のビルの上層階にあった東京都婦人情報センター(表参道の現東京ウィメンズプラザにその後移転)にしばしば通ったものである。インターネットのなかった当時は、各種集会への参加の他には、ミニコミ誌、チラシ、パンフレットを通してでしか、本当に欲しい、知りたい情報を得る方法がなかった。

阻止連の結成とその意義

「胎児の生命尊重」をレトリックに用いた、1980年代の改定の動きに対して、すぐさま様々な方面から反対運動が起こった。1982年7月、「優生保護法改悪＝憲法改悪と闘う女たちの会(イコールの会)」と「国際婦人年をきっかけとして行動を起こす女たちの会」による抗議集会が開かれ、同年8月には「'82優生保護法改悪阻止連絡会」(略称:阻止連。現在は、「SOSHIREN^{わたし}女のからだから」と改称)が結成される。阻止連の性格は、1970年代のリブ運動を受け継ぐものであると、荻野美穂は指摘している。阻止連の設立趣意書には、優生保護法の問題が、

次のように端的に述べられている。

「明治初年に墮胎禁止令が出されて以来、妊娠・出産は私たちの意志を越えて、国家の管理するところのものとなりました。天皇制国家の富国強兵政策・軍国主義を支えるため、明治十三年に設けられた刑法墮胎罪、そして敗戦後、戦後の混乱を解消するため墮胎罪を存続したまま条件つきで中絶を許可した優生保護法——この二つによって女性はときに産まされ、ときに墮させられてきたのです。さらに優生保護法とは、第二次世界大戦中、ナチス断種法をまねて作られた『国民優生法』を基にしたもので、その目的というのは『劣勢な遺伝』を抹殺し、国家にとって都合のよい人間のみを作ろうとするものです。」

このことから分かるように、阻止連の目指すところは、優生保護法の改定阻止のみならず、刑法墮胎罪および優生保護法そのものの撤廃であった。「当面の経済条項の削除に反対するだけでなく、70年代における障害者運動との連携を通して、同法が障害者に対して差別的であるばかりでなく、『生まれて良い子』と『良くない子』のふるい分けのために女のからだを利用しようとするものであるという認識」が共有され、その後、全国各地に阻止連の支部や参加団体が広まっていくこととなる。

改定阻止運動の広がり

さらに、リブ系以外の、中には保守的・体制的とも思えるような団体を含む、多様な女性団体によっても反対運動が展開されていく。日本婦人有権者同盟、大学婦人協会、日本キリスト教婦人矯風会、婦人国際平和自由連盟日本支部、全国地域婦人団体連絡協議会、東京キリスト教女子青年会、日本看護協会、主婦連合会(主婦連)、全国友の会、家庭科の男女共修をすすめる会、日本婦人団体連合会、新日本婦人の会、日本母親大会連絡会、婦人民主クラブ、日本生活協同組合連合会等々、宗教やイデオロギーを超えた問題として、女性たちに共有されていった。

こうした広範囲の女性たち結集の背景として、荻野は、1980年代の急速な政治の右傾化への危機感を挙げ、日本婦人団体連合会会長、櫛田ふきの以下の言葉を引用している。

「優生保護法改悪の中心になっている人たちは、一方で軍拡と憲法改悪の熱心な推進者である。『生命尊重』といいながら、同時に人間の生命を大量に虐殺する軍備を増強せよと主張する人たちに、私たちはかつて、『産めよふやせよ』と侵略戦争にかりたてた人たちの姿を思い出す」(婦人協同法律事務所編著『いまなぜ優生保護法改悪か』労働教育センター、1983年)。

そうした中、専門家集団である、日本母性保護医協会、日本家族計画連盟と同協会、日本助産婦会、日本産婦人科学会などからも反対表明が出され、ついには強い政治的発言力をもつとされる日本医師会も反対の立場をとるに至った。これらの広範囲にわたる団体からの阻止運動を受け、1983年3月末、改定案の国会提出は見送られることとなったのである。

[参考文献]

荻野美穂『女のからだ』岩波新書、2014年。

「碍」の字表記問題再考（5）

第2次世界大戦以前の表記

2010年の常用漢字表改訂にあたり、文化庁文化審議会漢字小委員会では国民に向けて意見募集を行っている。その意見募集で86件の追加希望が寄せられたのが「碍」の字である。その内容は概ね、第2次世界大戦前は「障害者」ではなく「障碍者」という表記を用いており、そのことに立脚して本来の表記である「障碍者」に戻すべきであるという意見であった。

「障害者」という言葉は、1949年（昭和24年）に制定された身体障害者福祉法で用いられた表現である。しかし、寄せられた意見では第2次世界大戦前の表記は「障碍者」であったとしている。果たしてそうであったのか、真偽のほどを確認する必要がある。また、それぞれの障害種別について戦前はどのように表現していたのであろうか。追加希望で指摘のあった「障碍者」の表記をわが国の行政文書から検証したい。

「養老律令」

まずは、757年（天平宝字元年）に施行された「養老律令」から見てみよう。大宝律令の改正版と言われ律令国家の根幹をなす法典である。内容は刑法にあたる律10巻12編と、生活上の諸規範を示す令10巻30編から構成されている。その令の第4編「戸令」のなかに障害を意味する記述が随所に見られる。この項目は、律令制において構成された基本的単位集団の枠組みについて定めている。具体的には、編戸・造籍、家の秩序、良賤の秩序、小規模な行政単位、教化政策などが纏々記されている。当時の記述を原文に基づいて紹介する。

戸令第五 戸主條：凡戸主。皆以家長為之。戸内有課口者。為課戸無課口者。為不課戸。不課。謂。皇親。及八位以上。男年十六以下。并蔭子。耆。癡疾。篤疾。妻。妾。女。家人。奴婢。

ここに書かれている内容は、一家の主は皆、家督を相続する家長が担うこと。そして、一家の内に律令制における租庸調などさまざまな負担の義務は家長が担う。もし、不在であればその義務は免除するとしている。免除の対象者となる「不課」とは、皇親、及び八位（国家の制度に基づく個人階層）以上、男子16歳以下、また、蔭子（庇護を要する子）、耆（高齢）、癡疾、篤疾、妻、妾、女、家人、奴婢を意味する。

この戸主條は主に課税に関する項目であり、人々に割り当てている労役、課税を免じる対象者が記載されている。そのなかの障害者の記述が癡疾、篤疾である。癡疾とは現代社会でいう中度の障害、篤疾は重度の障害に該当する言葉である。

戸令第七 目盲條：凡一目盲。兩耳聾。手無二指足無三指手足無大指禿瘡無髮。久濡。下重。大隰。如此之類。皆為殘疾癡。隴。侏儒。腰背折。一支癡。如此之類。皆為癡疾惡疾。癡狂。二支癡。兩目盲。如此之類。皆為篤疾。

ここでの表記が当時の障害種別についての記述である。片方の目が見えない、両耳が聞こえない、手の指が2本ない、足の指が3本ない、手足に親指がない、頭にできものができて髪が抜け落ちている（白癬寄生性匍行疹やハンセン病による脱毛）、久漏（身体が腐り、そこから膿汁が出て止まらない病気。重度の痔瘻）、下重（男子の陰核が張腫して歩行困難となる病気。陰囊ヘルニアまたは陰囊水腫）、頸部の腫れもの（風土性甲状

腺腫瘍の一種）、足の腫れもの（象皮病）。こうした類の人は、皆、殘疾とすること。

癡（重度の精神発達遅滞）、啞（発語不能の言語障害）、侏儒（小人症）、腰背部の骨折や脊髄損傷等による不自由があり、一支廢（片方の手足が機能障害）などは、皆、癡疾とすること。

惡疾（ハンセン病）、癩癩と精神障害、二支廢（両方の手足が機能不全）、両目が見えない、こうした類の人は篤疾としている。

このようにそれぞれの障害を詳細に記し、その障害の程度を殘疾（軽度）、癡疾（中度）、篤疾（重度）に分けている。

戸令第八 老殘條：凡老殘。並為次丁。

ここでの老殘とは、61歳から65歳までの男子と軽度の障害者の意味であり、それを次丁という言葉で表現している。

戸令十一 給侍條：凡年八十及篤疾。給侍一人九十二人。百歲五人。皆先盡子孫若無子孫聽取近親無近親外取白丁若欲取同家中男者。並聽。郡領以下官人。數加巡察若供侍不如法者。隨便推決。其篤疾十歲以下。有二等以上親者。並不給侍。

ここは今でいう介護に関する記述である。80歳の高齢者及び重度障害のある篤疾者には、侍（官人）を1人あてがうこと。90歳には2人。100歳は5人と記されている。その際、まずは子孫を優先的に充てること。もし子孫がなければ、近親を採ることを許すこと。近親がなければ、外より白丁を採ること。もし同家中男（17歳～20歳）を採りたいと欲する者には、いずれも許可すること。郡領以下の官人は、しばしば巡察すること。もし供侍が法に適っていない場合は、便宜に従って推決すること。篤疾が10歳以下で、二等親以上の親類があるならば、侍はあてがわれない。

戸令卅二 鰥寡條：凡鰥寡。孤獨。貧窮。老疾。不能自存者。令近親收養若無近親付坊里安隸。

この項目では生活困窮者に対する事柄が記されている。配偶者に先立たれた者、親や子が無く孤独な者、貧窮者、老疾（高齢で病気）者が自活できない者合は、近親者に収養させること。もし近親者がなければ、坊里に預けて安置供給させること。もし路上に在って病を患い、賦役に任じることができなければ、当地の郡司が収容し、村里に預けて安養させること。そして医療を施し、併せて事情を検討審問すること。つぶさに本籍など属すところを注記すること。病が癒えた日に、前の居住地へ移送することなどと記されている。

以上、「養老律令」における表現、文言を検証した。ここでの規範が現在の身体障害者福祉法の出典となっている。たとえば、身体障害者手帳の障害等級は1級から7級まで定められているが、その基準が「親指を欠くもの」「すべての指を欠くもの」などというように、「養老律令」の基準を参考にして障害等級を決めているのである。今も多大な影響を与えている「養老律令」であるが、当時の表現は現在では不適當用語として扱われるものもあり、目にするのが少なくなっている。今回、「養老律令」においては「障碍」の表記を確認することはできなかった。

[参考資料]

滝川政次郎『律令の研究』刀江書院、1966年。

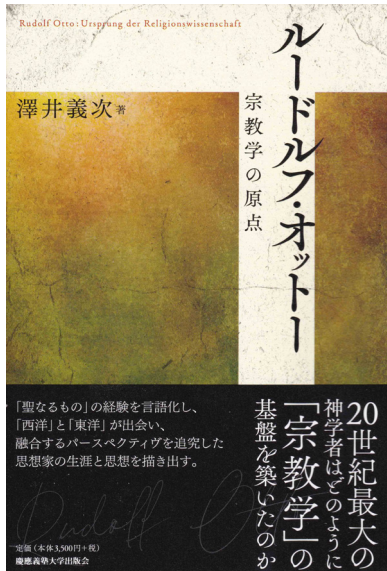
井上光貞ほか『律令』岩波書店、1976年。

天理大学教員の近著より — 2019 年度天理大学学術出版助成による著作

おやさと研究所教授
金子 昭 Akira Kaneko

『ルードルフ・オットー — 宗教学の原点 —』 澤井義次著、慶應義塾大学出版会、2019 年

ルードルフ・オットー Rudolf Otto (1869-1937) とと言えば、『聖なるもの』(1917) が有名である。この著作によって、プロテスタント神学史における彼の本来的意義が確立されたと述べたのは、パウル・ティ



リッヒだった。ルター派の神学研究者として学問的キャリアをスタートしたオットーは、宗教哲学者であると共に、キリスト教とインドの宗教との比較宗教研究者でもあった。本書は、オットーの宗教学の全体像を解明し、分かりやすく読み解いた画期的な著作である。

オットーは、神学者として初の世界旅行者になったと言われる。とくに

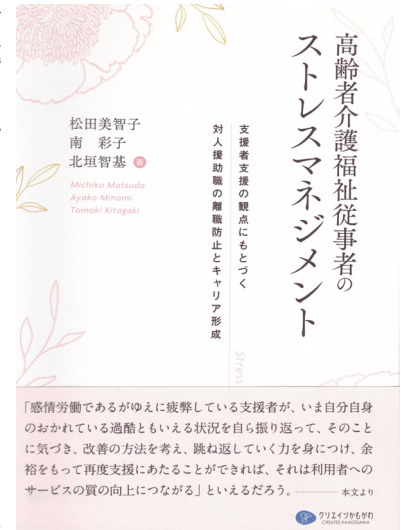
インド、ビルマ、日本、中国を訪れて東洋の諸宗教に出会ったことが、彼の宗教学を深みと幅のあるものにした。彼は東洋の旅の中で世界宗教博物館の構想を得たが、それはマールブルク大学に創設された「マールブルク宗教博物館」として実現した。マールブルク大学は天理教や天理大学とも縁が深い。同大学で開催された国際宗教学会議に 2 代真柱が出席したのを契機に、天理大学と半世紀以上にわたり交流してきた歴史がある。

キリスト教以外の諸宗教へのオットーの真摯な関心や開かれた姿勢は、「宗教人類連盟」としても結実した。これは、無信仰や迷信に対して諸宗教が協力して立ち向かおうとする国際的な宗教間対話の試みであった。残念ながらドイツ国内外をめぐる情勢のために、この連盟は 1933 年までにその活動を終えたが、こういうエピソードからもオットーの宗教観の開明性が見取れる。

本書は序章・結論を含めて全 10 章構成。19 世紀以降のドイツの神学・宗教学におけるオットーの意義について序章で述べた後、第 1 章ではキリスト教神学者としての彼の生涯、第 2 章ではインドを原点とする東洋への旅について概説。次に、『聖なるもの』における比較宗教論の構造 (第 3 章)、オットーの神学・宗教における宗教史学派の影響 (第 4 章)、また彼の独自の宗教史観である、東洋と西洋の宗教における平行性理論 (第 5 章) が続く。そして、彼の「絶対他者」の概念とヒンドゥー教の評価を論じ (第 6 章)、救済思想としてのヴェーダ哲学の議論を検討し (第 7 章)、イデオグラム (表意記号) に注目したオットー宗教論の新しい読み込みを行う (第 8 章)。第 5 章～第 8 章は、インド学に造詣の深い著者ならではのオットー論が展開され、学術的に読みごたえのある諸章である。最後に結論として、ルター派神学者、宗教哲学者、比較宗教研究者としてのオットーの 3 つの顔を総括する。

『高齢者介護福祉従事者のストレスマネジメント— 支援者支援の観点にもとづく対人援助職の離職防止とキャリア形成 —』 松田美智子・南彩子・北垣智基著、クリエイツかもがわ、2019 年

対人援助には 3 つの H が必要だとよく言われる。すなわち、温かい心 (Heart)、冷静な頭 (Head)、確かな腕 (Hand) である。しかし、昨今の介護福祉の領域では、慢性的な人手不足や施設での過重労働、また家庭内の老老介護など、数多くの問題を抱えており、援助者の負担やストレスも相当なものがある。見過ごされがちなのは、対人援助が感情労働だという側面である。3 つの H で言えば、まさに温かい心 (Heart) に関わる問題だ。介護従事者は相手の気持ちに寄り添い、献身的な介護を行おうとすればするほど、知らず知らずのうちに共感疲労を蓄積してしまう。共感疲労とは他者へのケアから生じる心理的疲弊のことであり、悪化すれば燃え尽き症候群や離職傾向を生む。そこで必要なのが“支援者支援”である。



本書は、高齢者介護に従事する人々のストレスマネジメントに光を当て、彼らをどのように支援したらよいか、アンケートや聞き取り調査を通じて課題を分析し、その対策について論じる。心や感情に関わる問題は主観的な要素が大きく、何よりも本人が意識して覚知することが必要である。そこで課題になるのが、そうした自己覚知のための「支援ツール」作成だ。筆者らは共感疲労やそこからの立ち直り (レジリエンス) の諸要素を項目別に数値化し、因子分析等を通じて有効な支援ツールの作成を目的に研究調査を進めてきた。

本書は全 10 章からなる。第 1 章では高齢者介護福祉の現状、第 2 章では社会福祉労働における感情労働及び共感疲労について論述する。第 3 章～第 6 章が本論部分に当たる。ここで高齢者介護施設の従事者に焦点を当て、職務ストレスの構造、共感疲労およびレジリエンス分析を行い、そのキャリア形成の視点と課題について詳しく論じる。第 7 章及び第 8 章では、職務ストレスやレジリエンスのセルフチェックに関する支援ツールの活用方法やその結果について報告する。第 9 章は、家族介護者および要介護当事者へのインタビュー調査の概要、また第 10 章は訪問介護事務所でのサービス担当責任者のストレス要因の構造と対策について述べる。

感情労働は社会福祉労働者だけでなく、営業職や接客業などサービス産業に携わる人々すべてに関わり、共感疲労もまた大なり小なり付きものである。巻末には「職場ストレス・レジリエンスセルフチェックシート」も付いており、読者は自己チェックもできる。

2019（令和元）年度「教学と現代」

“佐藤「元の理」学”の世界

日時：2020年2月25日13:00～15:30

場所：天理大学研究棟3階第一会議室

* 第一会議室へは、研究棟の北側の自動ドアから入り、エレベーターで3階に行き、右側へお進みください。

【開催趣旨】

佐藤孝則教授は生物学・環境学の研究を通じて、天理教の教えの根幹である「元はじまりの話」に登場する、神名を授けられたさまざまな水域棲生物を学術的に同定して、佐藤「元の理」学ともいえる学問的境地を開拓されました。

「元の理」については、例えば哲学の人間学からの蔵内数太先生の研究、民俗学からの吉野裕子先生の研究、また幅広く学際的な井上昭夫先生の研究などの、多彩な研究がなされてきています。これらの諸研究は、蔵内「元の理」学、吉野「元の理」学、井上「元の理」学とも呼んでもよいほどの学問的境地を有しています。これら「元の理」学の系譜の上であって、佐藤「元の理」学は、自然科学的なエビデンスを踏まえた独自の境地を開くものであります。

2019年度「教学と現代」は、佐藤「元の理」学の全体像について、佐藤教授ご自身から、これまでの長年にわたる研究の成果を踏まえてお話をいただくことにいたしました。

なお今回の講座は天理大学における佐藤孝則教授の最終講義でもあります。ご関心のある方々のご参集を、ぜひお待ちしております。



佐藤孝則
おやさと研究所教授

13:00～13:05 開会挨拶 堀内みどり主任
趣旨説明 金子昭研究員

13:05～14:45
講演 佐藤孝則教授
『「元の理」の自然科学的考察と今日的意義』

14:45～14:55 休憩

14:55～15:25 質疑応答

15:25～15:30 閉会挨拶 永尾教昭所長

事前のお申込みは不要です。お車で越しのさいは研究棟東側に駐車場がございます。

天理大学おやさと研究所 2020年度公開教学講座

事前予約不要
来聴無料

信仰に生きる 『逸話篇』に学ぶ（6）

第1回：4月25日（土曜）	永尾教昭所長	75	「これが天理や」
第2回：5月25日（月曜）	佐藤孝則研究員	77	「栗の節句」
第3回：6月25日（木曜）	岡田正彦研究員	88	「危ないところを」
第4回：9月25日（金曜）	澤井真研究員	93	「八町四方」
第5回：10月25日（日曜）	八木三郎研究員	106	「蔭膳」
第6回：11月25日（水曜）	堀内みどり主任	103	「間違いのないように」

場所：天理教道友社6階ホール
時間：午前10時～11時30分

*お車でのご来場はご遠慮下さい。

グローバル天理
第21巻 第3号（通巻243号）

2020年（令和2年）3月1日発行

© Oyasato Institute for the Study of Religion
Tenri University

発行者 永尾教昭
編集発行 天理大学 おやさと研究所
〒632-8510 奈良県天理市袖之内町1050

TEL 0743-63-9080

FAX 0743-63-7255

URL <https://www.tenri-u.ac.jp/oyaken/j-home.htm>

E-mail oyaken@sta.tenri-u.ac.jp

印刷 天理時報社

Printed in Japan